

令和 3 年 4 月 26 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 2019

受付番号 201960499

氏名

高橋 健二

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地： ナポリ東洋大学 （国名： イタリア ）
2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。
古代インドにおけるアディヤートマ哲学の解明にむけて
3. 派遣期間：平成 31 年 4 月 1 日 ～ 令和 3 年 3 月 31 日
4. 受入機関名及び部局名
受入機関名：ナポリ東洋大学
部局名：アジア・アフリカ・地中海研究科
5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意（A4判相当3ページ以上、英語で記入も可）**
(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)
(注)「6. 研究発表」以降については様式10-別紙1~4に記入の上、併せて提出すること。

古代インドにおけるアディヤートマ哲学の解明にむけて 日本学術振興会海外特別研究員制度、派遣後の研究成果報告

目次

1. 総括
2. 研究テーマ（申請書の概要）
3. 各研究課題についての研究成果
 - 3.1. アディヤートマという語の歴史
 - 3.2. インド医学文献との関係
 - 3.3. アディヤートマ哲学の歴史的位置付け
4. その他の研究
 - 4.1 『マハーバーラタ』写本研究
 - 4.2 元素論
 - 4.3 『シヴァダルモータラ』地獄章の校訂研究
 - 4.4 語源学研究

1. 総括

本研究の目的は、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』(BC 2C 頃～AD4C 頃)に見られるアディヤートマ哲学研究の基盤を構築することである。そして、1. アディヤートマという語の歴史、2. アディヤートマ哲学と医学文献との関係性、3. アディヤートマ哲学の歴史的位置付け、という三つの研究課題を設定し、解決に取り組んだ。

研究課題1については、『マハーバーラタ』およびそれに先行する文献におけるアディヤートマという語の用例を分析し、合計6つの文献がアディヤートマ哲学として見做しうることがわかった。その成果については、2回講演を行い(国際1, 国内1)、国際誌に論考を提出し、現在査読中である。また研究課題2については、アディヤートマ哲学文献の一つである『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』の脈管論および胎生学の研究を行なった。脈管論については、国内出版の学術図書の担当章として論考を提出し、査読を経て、近日刊行予定である。また胎生学については国際学会において発表を行い、現在同学会誌に提出する論考を準備中である。最後に研究課題3については、アディヤートマ哲学が特徴的に見られる『マハーバーラタ』がどのような社会的状況において成立したのかを探るため、本文献にたびたび言及される落穂拾いの実践ならびに馬祀祭の社会宗教的意味づけの分析を行なった。落穂広いの研究については国際ワークショップにて Nirajan Kafle 博士と共同で文献購読を行い、その内容を国際出版の学術図書における担当章として論考を提出し、査読を経て、近日刊行予定である。また馬祀祭の研究については、2回国際学会にて研究発表を行い、現在国際誌への投稿論文を準備中である。

2. 研究テーマ(申請研究計画の概要)

本研究の目的は、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』(BC 2C 頃～AD4C 頃)に見られるアディヤートマ哲学の全体的解明に向けて、その研究基盤を構築することである。

『マハーバーラタ』では、アディヤートマ(adhyātma)という語が頻繁に用いられる。この語は、先行研究では(1)「自我に関して・関する」という意味の副詞あるいは形容詞か、(2)「最高我」あるいは「内我」という名詞として理解されてきた。しかし用例を分析していくと、(2)の解釈は言語学的根拠に乏しく、従来の研究において(2)の解釈がなされてきた用例については、未だに意味を確定できない場合もあるが、(1)の意味で「教説」や「秘法」といった名詞にかかる形容詞であることが多いことが明らかとなった。さらにその中のいくつかは、この語を特定の教理を指す固有名詞として用いており、一つの思想潮流の名称である可能性が高いことがわかった。便宜上本研究では、この思想潮流を「アディヤートマ哲学」と呼ぶこととする。

本研究では、具体的に以下の研究課題を設定した。

課題 1: アディヤートマという語の歴史

課題 2: インド医学文献との関係

課題 3: アディヤートマ哲学の歴史的位置付け

各研究課題の成果は以下の通りである。

3. 各研究課題の研究成果

3.1. アディヤートマという語の歴史

要旨

アディヤートマという語の歴史を辿ることで、アディヤートマ哲学がどのように発展したのかを明らかにし、さらに今後どのような研究の可能性があるのかを示した。

内容

『マハーバーラタ』に先行するヴェーダ文献におけるアディヤートマの語の用例を精査し、この語は大宇宙や祭式上の事象との対比において、「自我・個我に関して」という意味で使われていることを確認した。またヴェーダ文献の初期文献においてはこの語が先ほど述べたような学派の存在を示唆する用例は見つからなかった。しかしヴェーダ文献の後期の文献である、『カタ・ウパニシャッド』および『アーパスタンバ法経』では、この語が学派や思惟方法の名称として用いられており、アディヤートマ哲学の淵源をこれらの文献に遡ることができる可能性があることがわかった。

さらに『マハーバーラタ』においてアディヤートマという語の用法を全て検証し、『マハーバーラタ』において以下の四つの教説においてこの語が自説を指す固有名詞として用いられていることを明らかにした。

- ・『バガヴァッド・ギーター』
- ・『アディヤートマ説』
- ・『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』
- ・『シュカの問い』の一部

以上の研究により、アディヤートマ哲学の淵源が『マハーバーラタ』に先行する後期ヴェーダ文献に見られること、さらに『マハーバーラタ』のうちどの教説がアディヤートマ哲学として見なすことができるのかを明らかにしたことで、今後のアディヤートマ哲学研究の方向性を示すことができた。

研究成果発表

以上の研究成果は、ナポリ東洋大学のレクチャーシリーズ World Philologies 3 にて、“Adhyātma Philosophy, Adhyātma Movement: Exploring Ancient Indian Psychology and Physiology” という題目で、また早稲田大学高等研究所 Top Runners' Lecture Collection 「インド思想研究の最前線」にて「古代南アジアにおけるアディヤートマ思想の全体的解明に向けて」という題目でそれぞれ講演を行なった。その内容を “*adhyātma* as a Designation of Discourses in the *Mahābhārata*” というタイトルの論文として *Journal of Indian Philosophy* に投稿し、現在査読中である。

3.2. インド医学文献との関係

要旨

3.1の研究において同定したアディヤートマ哲学文献のうち、特に身体論に強い関心を示す『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』の脈管論と胎生学を分析し、当時興隆しつつあった印度医学文献との影響関係を明らかにした。

内容

<脈管論>

『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ説』は、アディヤートマという語を、自説を指す固有名詞として用いている教説の一つである。本研究では、特にマナス(「心」と、マノーヴァハー(「心を運ぶ」と呼ばれる脈管を中心とする心身論を分析した。マナスは、マノーヴァハー脈とそれに従属する数千の脈管の中を行き来することで体中に遍満し、視覚などの感覚機能で知覚した情報を自我に伝達したり、運動機能に自我の命令を伝えるとされ、現代医学でいう神経器官のような役割を果たしている。さらに性的欲求がマナスを圧倒する時、人はマノーヴァハー脈管を用いて、身体のあらゆるところに存在する精液を集め排出するとされる。射精のメカニズムを説

明することで、性欲の抑制を促すことが本説の目的であったと思われる。臨終時には、修行者はマノーヴァハー脈管を用いて、マナスを身体中に遍満させ生気を体外に押し出すことで解脱を得るとされている。先行するヴェーダ文献にも体の中心を走る脈管を通じて解脱することが説かれており、また同時代の医学文献にも、体内に張り巡らされた脈管については詳細に論じられているものの、マナスによる情報の伝達、性欲との関係は説かれていない。このことから本説が、当時の身体論に依拠しつつも、マナスの概念を中心に心理的側面から人間の構造を捉え直そうとしたことが窺える。またこの教説は、後代のハタ・ヨーガ(身体的訓練を中心とするヨーガ)におけるスシュムナー説(体の中心を走る脈管による修行)やビンドゥ説(精液を体内に保持することによる活力の蓄積)を予見するものである。

なお、投稿した担当章ではヨーガの歴史についての新知見を提示することになっており、また『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』もアディヤートマ哲学であると同時に自身の思想をヨーガとして捉えているため、初期ヨーガ説として紹介した次第である。

<胎生学>

上記の脈管論が見られる『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』には、体内における胎児の発生を心理的側面から説明を試みる一種の胎生学的教説が見られる。

『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』の該当部分は、批判校訂版が存在するものの、校訂テキストに多くの問題があり、その教説の内容は不明な点が多かった。そのため、申請者は2017年3月に取得した現存最古の写本(N8)を用いてテキストに修正を施すことで、その教説の解明を試みた。本教説では、sattva(純質), rajas(激質), tamas(暗質)という三つのグナ(性質)が説かれている。先行研究ではテキストが確定されていなかったために、これらの関係性が明らかではなかったが、申請者の研究によってこれらのうち rajas が中心的な役割を果たしており、胎生学の文脈では、rajas は個別存在の欲求や欲望を表し、その欲求から欲求を満たすための様々な知覚器官や運動器官が発生するとされていることがわかった。

しかし本研究は、現段階ではテキストを修正しその内容を理解するにとどまっている。今後は『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』に先行するヴェーダ文献や、その同時代の医学文献における胎生学の記述とも比較しながら、『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』の思想史的価値を明らかにしたい。

研究成果発表

脈管論の研究については、藤井正人・手嶋英貴編『ブラフマニズムとヒンドゥイズム、第2巻 古代・中世インド宗教と実践』法蔵館(近日出版予定)における担当章「初期ヨーガ説の身心論とその思想的背景」(24p)として論考を提出した。すでに査読を経て採録が決定している。

胎生学の研究については、8th Dubrovnik International Conference for Sanskrit Epics and Purāṇas において、“Embryology, Chastity, and Sāṃkhya in the *Vāṛṣṇeyādhyaṭma* of the *Mahābhārata*.”という題目で口頭発表を行い、現在同学会誌への投稿論文を準備中である。

3.3. アディヤートマ哲学の歴史的位置付け

要旨

アディヤートマ哲学が多く収められている『マハーバーラタ』がどのように社会的文脈において編纂されたのかを分析するため、『マハーバーラタ』において活発な議論が行われている、馬祀祭と呼ばれる王権儀礼と落穂拾いによって生活するという清貧の実践についての分析を行なった。

内容

<馬祀祭>

『マハーバーラタ』第14巻では、大戦争に勝利したユディシュティラ王が、戦争中に犯した罪悪を償うために、馬祀祭と呼ばれる大規模王権祭式を行う。しかしこの祭式の挙行や有用性をめぐって、賛否様々な見解が提示される。この馬祀祭は、バラモンという祭官階級によって挙行され、挙行後には祭官たちに多くの布施が行われる。したがって、馬祀祭に関する理解は、当時の社会における支配階級に関するイデオロギーの縮図とも言える。それらの見解は、王権と協力して祭式を中心とした国づくりを目指す祭官階級よりの見解、また祭式を哲学的に理解し、祭式を克己とする見解、祭式における殺生や無駄を厳しく批判する仏教やジャイナ教といった新興宗教側の見解があり、これら見解は、当時のアディヤートマ哲学形成時の思想状況を反映している可能性があることを示した。

<落穂拾い>

落穂拾いとは、田畑に落ちた穀物だけで生活するという清貧のライフスタイルであるが、『マハーバーラタ』では五つの物語において言及されている。落穂拾いの実践は、古代南アジア世界において人々の社会や生活を規定する法典文献では、主に家住者や林住者の清貧の行いの一つとされているが、その実践に特別な倫理的・哲学的な意味づけは見られない。しかし『マハーバーラタ』では、落穂拾いの実践には天界に生まれ変わるという果報をもたらすとされ、当時仏教やジャイナ教あるいはヨーガといった修行体系においてその目的とされる解脱と対比されていることが明らかとなった。さらに本研究では、法典文献や『マハーバーラタ』に見られる落穂拾いの教説が、ナポリ東洋大学の共同研究プロジェクトで研究を行なっているシヴァダルマ文献群のうち、『ウマーとマヘーシュヴァラの対話』に見られる八つのダルマ説に影響を与えていることを明らかにした。

研究成果発表

馬祀祭の研究については Convegno dell'Associazione Italiana di Studi Sanscriti にて “Donation and Royal Ritual in the *Mahābhārata*: A Study of the *Dānadharmaparvan* and the *Āśvamedhikaparvan*” という題目で、The 231st Meeting of American Oriental Society にて、“Yudhiṣṭhira's Contested *āśvamedha*” という題目でそれぞれ学会発表を行い、現在後者の学会誌に提出する論考を執筆中である。

落穂拾いの研究については、The Śivadharmā Project Pondicherry Workshop にて、Nirajan Kafle 氏とともに “Readings from *Mahābhārata* 13.129, *Mahābhārata* 13, Appendix 15, lines 678–740, *Umāmaheśvarasamvāda* Chapter 1” という題目で文献購読を行い、Florinda De Simini 准教授と Csaba Kiss 博士の共編著における担当章として “The Dharma of Gleaners in the *Umāmaheśvarasamvāda*: Studies on the Śivadharmā and the *Mahābhārata* 2” という題目の論考を提出し、査読を経て、近日出版予定である。

4. その他の研究

4.1 『マハーバーラタ』写本研究

2020年1月にネパールのカトマンドゥウに赴き、ネパール国立文書館で写本調査を行なった。以前、『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』の部分についての古写本 Ñ8 の電子複写を入手し、それに基づいてテキストの修正を行なったが、いくつかの部分について欠損が見られた。今回は Ñ8 の断片を収集した写本 Ñ9 の電子複写を入手することができた。Ñ9 によって『ヴァールシュネーヤ・アディヤートマ』のテキストについてさらに正確なテキストを提示できる可能性がある。

また、ナポリ東洋大学の受入研究者である Florinda De Simini 准教授が研究代表者を務める、Śivadharmā Project では、特に『マハーバーラタ』の写本伝承と Śivadharmā 文献群の関係を調査している。その成果の一部として、ブラフマイズムとヒンドゥイズム第8回研究会にて、『マハーバーラタ』および『ハリヴァンシャ』の南方伝承とバラモンの移住についての最近の研究動向：Mahadevan (2008, 2013) レビュー」という題目で、昨今の『マハーバーラタ』写本研究の動向と問題点を報告した。

4.2 元素論

研究開始当初は、『マハーバーラタ』に見られる『ブリグとバラドヴァージャとの対話』もアディヤートマ哲学の一部であると考えていたが、研究課題1を進める過程で、他のアディヤートマ哲学との関係性はあるものの、本教説をアディヤートマ哲学として同定することは難しいことが判明した。しかし本教説に見られる元素論は古代インドにおける元素論の発展を追う上で重要であり、またアディヤートマ哲学における元素論を分析する上でも資するところがあると考え、本教説の研究も同時に進めていた。

古代インドでは元素については mahābhūta 「大きな、もしくは偉大な元素・存在物」という言葉が用いられる。一般的にはインド哲学では元素は様々なものを構成する粒子のようなものとして捉えられているため、一般的に mahā 「大きい」というのは比喩的な意味で「中心的な、主要な」という意味であると理解されてきた。しかし少なくとも本教説では、元素は粒子のようなものではなく、この世界を取り囲む巨大な存在物とされ、字義通りに「大きな元素」として理解されていることを示した。さらにこの世界を巨大な元素が取り囲んでいるという世界観は、後代のプラーナ文献に見られる世界観に影響を与えていることがわかった。

本研究の成果については、Three-day International Conference on Mahabharata in Literature and Tradition において“Why are *mahābhūtas* ‘Large’? Early Investigations on the Elements of the World Found in the *Bhṛgubharadvājasamvāda* of the *Mahābhārata*.”という題目で、さらに第27回インド思想史学会にて「*Bhṛgubharadvājasamvāda* (*Mahābhārata* 12.175–185) における元素論と宇宙論」という題目にて学会発表を行い、後者の学会誌に投稿する論文として準備中である。

4.3 『シヴァダルモッタラ』地獄章の校訂研究

Śivadharmā Project において R. Sathyanarayana 教授（フランス極東学院）と共同で、紀元後6-7世紀ごろの成立と思われる『シヴァダルモッタラ』の地獄章の校訂研究を開始した。現在約半分の校訂が終了し、校訂テキストと英訳を共著として出版する予定である。

4.4 語源学研究

川村悠人准教授（広島大学）ならびに堂山英次郎教授（大阪大学）とともに、ヤースカの『ニルクタ』に見られる語源学の方法論とその意図について神名アグニに注目して分析を行い、『南アジア古典学』に共著論文「神の名の意味を知ること—神名アグニの分析に見るヤースカの語源学と神学」を出版した。